

Title	革命の遠兆としての外國旅行 (上) : (我維新史に就て革命理論上の一考察)
Sub Title	
Author	板倉, 卓造 (Itakura, Takuzō)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1935
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.14, No.3 (1935. 11) ,p.1- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19351108-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

法
學
研
究
第十四卷 第三號

革命の遠兆としての外國旅行（上）

——（我維新史に就て革命理論上の一考察）——

板
倉
卓
造

一 序 言

二 社會不安と外國旅行の相關現象

1 フランス革命とロシア革命

2 『スエーデンの俘囚』

三 我維新革命に於ける特例

1 洋學者の受給遊學

(二) 長崎

革命の遠兆としての外國旅行

革命の進光としての外國旅行

(一) 一外國を成せる長崎

(二) 西洋文明の出張所 (以上本號)

2 甲比丹の江戸參府 (以下次號)

3 北邊の探検

4 異國漂流

四 結 言

一 序 言

革命と進化の關係に就て、アンリ・セーは「若し進化がなく又は進化が餘り緩漫なること、例へば印度又は支那の如くならば、確に革命は起らない。ここでは變化は外部からの壓力(例へば征服又は移住の如き)に依つて行はれるに過ぎない」(Henri Séé, *Evolution et Révolution*, p. 245)と云ふ説を成してゐるのであるが、私見を以てすれば、それは史實に反するのみならず、眞理は寧ろ却つて其逆に在るが如し。例へばセーが引例の支那の如き、其政治史は古來頻々たる易姓革命の歴史である。少なくとも夏殷の滅亡以後に於ける王朝の改易幾度なるを知らず、最後の清朝が亡びたる後に在りても、屢々革命の變動を繰返へしてゐるのである。即ちセーの所謂「進化がなく又は進化の緩漫」なる支那幾千年來の歴史こそ、世界に於ける最も革命の頻發したる最適例であると云はねば

ならない。畢竟進化が停頓するが故に、之を打開する爲の革命が起るのであつて、若しも断えず進化が行はれ、よく時代と共に推移して、凝滞底止することなければ、革命の急變を促す必要もなく又固より其理由もない。マコーレーが會て「革命の大原因は斯うだ。即ち國民は前進するのに憲法が靜止するに在る」と云つたのは、正しく同様の意味であつて、進化なき所にこそ革命の可能性は豫想せらるゝも、進化ある所に其危険は多く避けられるのである。ボウマンはフランスの憲法が、毎度革命に依つて改廢せられ、之に反してイギリスではそれが改革に依つて行はれることを指摘し、此相違をイギリス憲法が軟性で、フランスのが硬性であることに歸し、

「フランスの憲法は革命で作られた。だからそれを廢棄するのも亦専ら次ぎの革命に依るのであつた。即ちナポレオン三世が「フランスに於て吾々は革命をやつたが、改革はやらなかつた」と云つた所以である。然るにイギリスに於ては憲法は軟性であるから、改革が行はれて革命は避けられる。新しくしてイギリスの民主政治は、一つの古い憲法が堅實に進化して創造せられたのである。之に反してフランスでは、一世紀もたゞの間既に憲法が十三も作り換へられた。其譯は各憲法は一つの政治學說を硬直に書き表はしたものであるので、自ら一種の鑄鐵の模型となつて、一切の變更を許さなかつた爲に、國民生活狀態の變化に應せんとするには、之を破壊するの外はなかつた

からいふる(J. Bowman: An Introduction to Political Science, p. 163)

と説明してゐるのは、革命と進化の關係を極めて適切に例示したものである。

二 社會不安と外國旅行の相關現象

凡そ一切の社會制度は時代を重ねると共に自ら固定膠着して、流通性と應變性を失ふに至るのが、其常例であるから、何時しか人心に倦怠沈滞の情を生ぜしむる一方に、或はよく時代の變遷、環境の變化に適應して、漸次舊制を改廢し、舊弊を打破して、改進黨一途以て人心をして常に倦ませしめざるものもある。所謂進化に巧なるものなれども、然も舊慣の情性を甚だ強くして、到る處に其新進路を塞塞せられ、現状打開の機會を得ること殆ど絶望なる結果、人心自ら鬱結して、何となく不安の氣を醸し、繼て不平の情を發せしむるに至る。來らんとする革命の最も早き前兆の一つは、人心の間に見る此不安不平の増大である。尤も最初の間は其情形極めて漠然たるを免れず、随つて不安不平が何の故たるを解するものなく、固より進んで其原因を探究せんとするものどてなきも、斯かる際に先づ現はるゝ特異なる新現象の一つは、國內に於ける此不安不平の爲に、人の國外に出遊又は脱出するもの漸く多きを加ふる傾向である。ライフォード・エドワーズは國外旅行の傾向を以て、革命の遠兆の一つとする學者の一人であるが、旅行と社會不安は相關的であるとして、『不安は旅行

を促し、旅行又不安を増す』と云ふのである。(Lyford Edwards, The Natural History of Revolution, p. 23)

外國を旅行して自國に歸りたるもの、多くが、其みやげ話として語る所は、大抵諸外國の文物制度が自國のそれ等と比較して、大なり小なり優れてゐることを賞揚するに於て、概ね一致してゐる。固より其見聞する所僅に一局部に過ぎざるものあらん。又その着眼の甚しく見當違ひなるものもあらん。又その鑑識の極めて淺薄なるものもあらん。然れども總じて外國旅行者の齎す所謂みやげ話は、一般に諸外國の國情を讚美するのが一の定則である。自國內には何となく人心に不安ある處へ、外國より歸り來りたるもの、物語る諸國の美まじき國情を聞くに就け、自國の沈滞せる現狀を顧みて、いよ／＼其不安を加へ、遂に堪へ難き不平をも併發するに至るは自然の人情である。不安を加へ、不平をも併發するに至ると共に、國內を去つて外國に行くものもますます／＼多ければ、國外より自國の國情を觀察して、現狀に對する不滿の念を一層強うして本國に歸る其結果は、いよ／＼ますます國內の人心に不安不平を刺戟する一方である。但し自國の現狀に對する不安を以て、後年起るべき革命の前兆であるなどは、最初これを想像するものすらなく、不平を懷いて自ら國外に出づるものも雖も、革命の豫想の如きは、全然念頭になき所である。否な國情に對する不安不平から、

(300)

人の國外に出遊又は脱出すること夫れ自體が、常に革命の遠光であると解してはならない。不平の徒を内より外に拂ふことに依つて、却つて自ら危険の分子を除くことにもなるのであるから、寧ろ革命を避ける方の可能性こそ多いのである。故に人の國外に旅行するものが多いと云ふ一傾向だけを見て、革命の來否を速断することは出来ない。然も後日より顧みれば、歴史上の大革命に於て國外に出づるもの類に多くなる國情は、早晚來らんとする革命の遠き前兆の一つと認め得べきが如く、史實に徴するに、革命と國外旅行との間に、因果關係の極めて明白なるものがある。

即ち人が類に國外に旅行し出すと、それが纏て革命の一遠因たるに至ると云ふエドワーズ一派の學說の成立する所以であるが、其革命の遠因たるに至る國外旅行の事情は、必ずしも各人同様ではない。(一)國情に不安を感じ又は不平を懐くものが、自發的に外遊するの例は最も多く、(二)危険思想を鼓吹し又は革命運動を企てたるの故を以て、國外に放逐せられ、又は脱走して亡命するものもある、(三)歴史上に極めて稀な例ではあるが、外國の爲に征服された國の住民が、俘虜として、國外に連れ出されたこともある。

1 フランス革命とロシア革命

フランス革命前殆ど十八世紀を通じて、學者の國外に出遊するもの相續さ、中にもヴォルテヤ

が一七二六年より二九年至る三年間の英國亡命は、當時著名有力なるイギリスの政治家、政論家
 學者等との間に廣く交友を得て、彼をして親しく同國の學問と政情に通せしめ、其歸國後著したる
Letres sur les anglais 中には、英國憲法を説て之を絶讃し、イギリスこそ世界に於ける最善政の
 國であると歎美した。滯英中始めてロックの哲學を知りて悉く之に傾倒し、『ロックを讀みたる者は、
 何人もブラドリーの輩が單なる巧妙の談論家たるに過ぎざることを認めざるを得ない』と激辯措かざ
 りしと云ふが如く、實際イギリスは彼に取りては其精神的本國であつた。イギリスの思想は後年彼
 が願ふ效果的に利用せし骨と肉とを養ふた。モーレーは評してゐる (Lord Morley, *Voltaire*, ch.
 三)。而して彼は實に大革命の起る二十五年前、一七六四年既に革命の必至を豫言して、『若い者等
 は仕合はせだ。彼等は素晴らしいものを見るであらう』と云つたと、著名なる一史家は傳へてゐる
 (Charles Seignobos, *Histoire sincere de la nation française*, p. 342)。モンテスキューに至つては、隣
 國の政治及び社會制度を研究する爲に、ウイン、ヴェネチヤ、ローマ、スイス、オランダ、イギリス
 等普く四方の諸國を遊歴した。中にも一七二九年より三一年に至る一年有半、彼はイギリスに足を
 留めて、同國の上流社會に交はり、又頻に議會に出入して、具さにイギリスの政治を觀察し、本國
 に於けるルイ十五世の度し難き專斷政治と、此國に於けるジョージ二世の寛厚なる立憲政治との對

照に深く心を動かされた。彼も亦その滯英中ロツクの政治書を耽讀して、多大の感化を受けたのであるが、後年の名著 *Espit des lois* (1748) が、其間に於けるイギリス政治の實地研究の成果たるは、人のよく知る通りである。後年の大革命を誘發したる新思想の有力なる指導者として、ルーソフに次ぐものがヴォルターヤとモンテスキューであることも、亦史上に周知の事實である。而して兩人ともに其新思想の本源が、明白にイギリスに在ること即ち既記の如し。

ロシアの革命史に於ても亦同様の事實が認められる。ナポレオン戦争に於てロシアの軍隊も多年西ヨーロッパに出征してゐた。之が教育ある若いロシア人に西歐の文化、殊にフランス革命の政治思想や、新しい政治制度に直接々觸見する機會を與へた。ナポレオン遂に敗戦して、一八二五年以後ロシア軍が本國に引揚げると共に、出征の士官等は歸國後その新思想を以て、壓制政治の依然たる自國々情を見るに忍びず、『我々は壓制者(ナポレオン)から我國を救ふた。然も我自國の專制者は我々を壓制してゐる』とて、失望憤懣の餘、彼等は同志の間に秘密結社を作り、特權の廢止、農奴の解放、司法の獨立、兵役の緩和等を目標として、改革を行はんと決心し、竊に徒黨を集めた。後に所謂「十二月黨」(Decabrist)は即ちこれである。機を待つこと十年、遂に一八二五年十二月に至り、偶々アレキサンダー一世崩じて嗣子なきに乗じ、近衛の士官と教育ある貴族等は、同月十四日

(露曆)露都ペテルスブルグに於て、クーデタを企て憲法を要求した。併し此運動は忽ち鎮壓されて悉く失敗に終つたのであるが、其失敗は彼等自身最初から覺悟した所であつた。蓋し彼等の期する所は之に依つて後の志あるものに一のレソソンを興へんとするに在つたからである。故に其失敗に拘らずロシヤの民心に極めて強い印象を興へ、『十二月黨』は後代の自由主義者と革命運動者に依つて、自由の先驅者として尊敬追慕せられたのである(Michael Karpovich, Imperial Russia, 1801-1917, p. 28)。若し夫れ壓制政治に對して不平を懷き、ロシヤを脱出して、國外より革命運動を使賊又は指導したるものに至つては殆ど其數を知らず。就中著名なる無政府主義者バクニン(1814-1876)の如き、パリに於て無政府主義の父と稱せらるゝブルードンに始めて會ひたる後、一生を革命運動に投ずるの決心を爲し、或はフランスを逐はれ、或はドレスデンの暴動に参加し、シベリヤの流所を脱してイギリスに逃れ、一八七六年ベルンに死するまで、スイスを本據として、本國ロシヤの專制政治に對する革命の陰謀を一日も忘れなかつた。或著者は今のソヴェト・ロシヤの共產黨には其イデオロギイに何等認む可きオリジナリチトなく、それは單にマルクスの獨斷的教義とバクニンの無政府主義觀と、漠然結び着けたるものに過ぎなからざるを云つてゐる(O'Hara and Makeel, Russia, p. 32)。以てロシヤ革命史に於けるバクニンの地位を知るに足る。或意味に於て彼の後繼者とも稱す

可きクロボトキン公 (Krobovkin) は無政府主義の學者として、世界的尊敬を負ふものであるが、虚無主義を宣傳したる故を以て捕へられ、逃れて國外に出で、或はイギリスに、或はスイスに、或はフランスに放浪し、遂に一八八六年イギリスに安住して以來専ら著作を以て革命主義を鼓吹すること前後三十年、一九一七年本國革命の成るや、始めてロシヤに歸るを得た。大革命の實行者たるレニンとツロツキの如きも亦夙に國外に亡命し、革命勃發の當時レニンはスイスなるツトリヒに在り、ツロツキはニューヨークなるブロンクスにゐたが、共にロシヤを出で、以來、普く諸國の間に轉々し、又竊に本國に歸りて革命陰謀を煽動し、一九〇五年に失敗したる革命も亦兩人の參畫した運動であつた。

2 『バビロンの俘囚』

ユダヤ人は太古より放浪流轉の漂泊民族であつた。アブラハムの孫ヤコブが一族を擧げてエジプトに移住し、更に四百年後再びモーゼに率ゐられてエジプトを脱出したる遠き故事は云ふも更なり、紀元前五八八年バビロン王ネブカデネザルの爲にエルサレムを攻め落されて、イスラエルの種族はバビロンに俘囚となつて七十年を経た。所謂『バビロンの俘囚』(Babylonian Captivity) の此七十年こそ、ユダヤ民族の間に後年宗教革命の種子を植付けたのであつた。豫言者エゼキエルの如き、ダニ

エルの如き、ハガイの如き、ゼカリヤの如き、又は祭司エズラの如き、其手に成れる記録は今日舊約聖書の大部分を占むるものなるが、皆是れ曾てバビロンに俘囚の幾歲月を送つたものであつた。ユダヤ人は其俘囚の間、當時の燦爛たるバビロンの文明に悉く感化せらるゝと共に、彼等が之まで懐きしエホバに對する信仰に俄然大變動を來たした。蓋し彼等が太古遊牧生活時代より神として仰ぎしエホバは、専ら彼等の種族の間にのみ現はれ、又彼等の住へる狭き國土に限りたる一の種族神もしくは地方神であつて、然も單に怖しき軍の神として崇められたものに過ぎなかつた。然るにバビロンに於ける七十年は、豁然として彼等の眼を開かしめた。即ち神は全世界に唯一にして、全世界の唯一の支配であり。神は慈悲仁愛の父にして正義公道の主である。怖しき軍神にも非ず、固より一種族、一地方のみの支配者にも非ざることを、バビロンの俘囚の間に、彼等は發見自覺したのである。斯くして多神教より一神教に轉じたる彼等の信仰的革命の上に、今日の所謂ユダヤ教は發芽成育したのであつて、後世のクリスト教々義の發現も亦實に茲に存するのである。而して彼等の信仰に此革命的變動を指導したものは、後年バビロンより釋放されてエルサレムに歸りたる前記幾多の豫言者達であつた。是等の指導者は其俘囚たる間、バビロンの特に進みたる智的文明の刺激に依つて大に開發せられたる一方に、殊に幸なるは當時の世界に於ける古今の書を読み、獨り靜に

默想するの機會を得たことである。當年のバビロンは所謂カルデア帝國の都であつて、其カルデア帝國は紀元前六一二年アッシリヤを亡ぼして合併したものであるが、アッシリヤ帝國の舊都ニネヴェには、同帝國最後の皇帝ナルダナバラスが多年苦心して蒐集したる太古以來の文書、記録（何れも粘土板に印刷せらる）を藏せし大圖書館があつて、世界最古の最大なる圖書館と稱せられ、後世發掘せられた其遺物二萬三千部は、今日現に大英博物館に保存されてゐる。ユダヤ民族の新指導者達は、其俘囚の間に、是等の古文書、古記録を讀みて、世界の歴史を知ると共に、自ら彼等の眼界を廣く且つ新にした。更にカルデア帝國最後の皇帝ナボニダスも亦古文書研究に熱心にして、餘に之に心を奪はれた爲め、ヘルシヤ王キロスの侵入に備ふ可き國防を忘れ、紀元前五三九年遂に其國を亡ぼすに至つたと云はれる程であるから、當時バビロンに於ける學問の隆盛も、之に依つて察することを得べく、殊に帝は大膽なる宗教改革者であつて、國內無數の地方神を、バビロンなる Marduk 神の拜殿に統一して、一種の一神教を行はんとしたのである。帝の此英斷を見撃して、俘囚のユダヤ人が彼等のエホバを以て一地方神視した古來の信仰に、一大動搖を來たしたのは云ふまでもない。耶らウエルスが云ふが如く、ユダヤ人は野蠻人としてバビロンに行き、文明人としてエルサレムに歸つて來たのである (H. G. Wells, *Outline of History*, p. 265)。實際に舊約聖書の大部分は彼等

が、ピロンから歸つて後に完成したものであつた。ペルシャ王キロスの爲に俘囚から釋放せられて、本國に歸りたる多くの豫言者は、斯くして宗教革命家たるに至つたのである。彼等の此思想的變化は、實に彼等と彼等の民族が、ピロンに俘囚たる七十年間に成つたと云はるゝ所以である。

近代世界の社會革命家として最も偉大なるカール・マルクスも、亦彼等と同民族なるユダヤ人であつた。彼はドイツに生れてパリに亡命し、フランスを逐はれてブラッセルに逃れ、一八四九年イギリスに安住して、一八八三年ロンドンに死するまで、一生を他郷に轉々したる放浪者であつた。アメリカ獨立革命の當時、其革命の有力なる支持者が、亦轉住のユダヤ人であつたと稱せられ、更にフランス革命を成就したる著名なる革命家の中に、多くのユダヤ人のあることは、夙に周知の事實であるが、既記のツロツキーと共に革命の功勞者たり、一時ソヴィエト政府の最高要路に在つたカメネフも同じユダヤ人で、多年パリに亡命してゐた。今の外交委員長リトヴィノフ亦ユダヤ人にして、革命前イギリスに逃げてゐた。ユダヤ人は古來世界の放浪民族であつて、且つ最も多く著名の革命家を出した民族である。而して是等の革命家が大抵諸國の間に轉々して、定住なき無宿の亡命者であるのは、革命と國外流浪の關係を、最もよく實證する適例である。

三 我輩新革命に於ける特例

革命の發端としての外國旅行

1 洋學者の長崎遊學

(一) 長崎

然るに我維新革命に於ては、其革命の遠光として以上の諸革命に見るが如き同様の例はない。即ち國事を慨して外國に出でたるものなく、他國の國情を知らんとて外遊したるものなく、又政治上に罪を犯して國外に亡命したるものもない。徳川氏三代家光以來の鎖國令に依つて、外國との交通を禁じられた爲に外ならない。故に歴史上の大革命に略ぼ共通すと稱せらるゝ革命前の國外旅行の一特徴は、我維新革命史には認められず、畢竟鎖國の當然の結果である。併し我革命の一遠因が、蘭學の輸入に依る海外知識の開発に在りて、蘭學の勃興と共に、自ら西洋の事情、世界の形勢を知るに從ひ、從來のまゝの國情を以ては、到底外國と拮抗することの出来ない所以を自覺するに至つた其國民的自覺こそ、後年の革命運動を促進した一動因とせらるゝ點に於て、フランス、ロシア等の革命が、外國より歸來し、又は外國に亡命せる革命家、新思想家の嚮導に依つて、外國の國情を知り、自國の沈滞せる現状を打破せねばならぬとする國民的自覺を刺戟し、以て後年の運動の其最初の端緒を開いたものと、其結果は即ち一にして、唯だ我は居ながらにして海外の知識を得、之を齎したものが専ら外國人、即ち長崎渡來のオランダ人たる一事に於て異なるだけである。否な徳川

時代當年の實狀に於て、長崎は實は鎖國日本に對する一外國を成してゐたのであつた。

茲に長崎の歴史を述べる必要はない。唯だ本論を進行せしむる爲に、長崎が其貿易開港より徳川氏の末期に至る約三百年間、日本國土の他の地方とは、行政的にも、經濟的にも、文化的にも、殆ど獨立したる特異の存在であつた點に就て、簡略ながら説明を付けて置かねばならぬ。

元龜元年(1576)ポルトガル商船一隻長崎に来る。長崎がヨーロッパ船との貿易港たる最初である。爾來ポルトガル船即ち所謂南蠻船は、東洋に於けるポルトガルの根據地たる媽港(今の澳門)より、年々貨物を積みて渡來したので、長崎は南蠻通商の定港と成り、次第に商館をも設けたれば、商人の四方より移住するもの多く、久しからずして我海外貿易の一要港たるに至つた。其住民中には開港前から吉利支丹を信ずるもの少なからず、殊に開港後は島原、平戸、横瀬浦等處にポルトガル船が出入して、耶蘇教の宣傳された地方の人民が重に移住し來たので、長崎に於ける耶蘇教會の宣教師は住民に對して精神界の支配者であつたから、當年の長崎は少なくとも宗教的に宛然たる獨立の自由市たる觀があつた。更に天正八年(1580)及び天正十二、三年(1584)の頃に至り、熱心なる耶蘇教信者たる領主大村氏は、長崎及び其附近の地を、耶蘇教會に寄附するに及んで、長崎市政の實權は全然ポルトガル宣教師の手に歸し、長崎は事實上ローマ法皇の公領化するに至つた。されば天

正十五年(1648)秀吉九州を征して博多に居るとき、訴ふるものあつて長崎の實情を聞き、大村氏領の御厨候を檢したるに、『長崎南蠻切支丹領』と記してあつたと云ふ。仍つて秀吉は翌天正十六年これを取上げて直轄の官地と爲し、後更に鍋島氏を長崎代官に命じ、同時に在任の宣教師に歸國を嚴命したのであるが、通商に至つては禁ずることなかりしを以て、長崎は依然ポルトガル商船の爲に貿易港として繁榮した。其後家康の時代に於ては、特に海外貿易を奨励する政策を採つたので、長崎にはポルトガル船の外、スペイン、オランダ、イギリス、明國等の商船出入するもの漸次多く、慶長の末に於ける貿易の隆盛なること、同十八年(1653)に長崎に入港した外國船は百二十餘隻に及び、貿易諸港中繁昌第一であつた。元和二年(1616)二代秀忠の政府は、天主教の傳道に就て家康以來の禁令を一層嚴重にする爲め、爾後海外貿易を長崎と平戸の兩港に限り、其他の諸港は實際には閉鎖したので、長崎の繁昌ますます隆運に向ひたるが如し。

(二) 一外國を成せる長崎

然るに三氏家光に至つて天主教嚴禁のことから、遂に鎖國を斷行したので、我海外貿易は茲に一頓挫を來した。之より先き禁教に依つて先づスペイン人の通商を止め、次てポルトガル人も最早や往時の如く通商の利なく、衰運に傾く一方であつたが、イギリス人亦貿易の利益を得ずして平戸の

商館を閉ぢ引揚げたる等、形勢一變の中に在りて、獨りオランダ人のみは平戸にて隆昌の勢を占め、殊に幕府に進言して天主教の禁止を勸告し、以て通商の競争者たるポルトガル人を日本から驅逐して、我海外貿易の利を其一手に獨占するの策に出た。斯くて家光の政府は寛永十年(1633)以後屢々嚴令を發して、日本人及び日本船の海外渡航を禁じ、異國船の貿易を著しく制限し、重刑を以て天主教徒に臨んだから、ポルトガル人及び其子孫は遂に日本を逐はれて、多く媽港に退去し、殘留者は之を新に築いた長崎出島の南蠻館に收容して、堅く長崎市内に雜居することを禁じた。寛永十四年(1637)島原の亂起るに及んで、幕府は南蠻諸國の通商を全く禁絶して、天主教の根本を制止するの必要を認めた結果、寛永十六年(1639)を以て長崎の南蠻館を閉鎖し、ポルトガル人全部に退去を命じて、再び渡來することを禁ずる旨、嚴達した。之を寛永の鎖國令と稱すること、人のよく知る通りである。併し此鎖國令は南蠻人殊にポルトガル人との通交を禁じたものであつて、オランダ人と明國人とは禁外に置かれたのであるが、當時長崎はポルトガル人總退去の後、纔に唐船の通商港となつて、俄に衰運に陥つたので、幕府は長崎市民の嘆願を容れ、寛永十八年(1641)平戸のオランダ商館を鎖して、之を長崎出島に移し、前年の南蠻館に居ることを許すに及び、爾來我海外貿易は専らオランダと明國の二國に限る、貿易港亦長崎一ヶ所に限られること、なつた。

右の如く寛永十八年(1641)長崎を以て日本唯一の海外貿易港と定めたときから、安政六年(1829)米、露、蘭、英、佛の諸國に、長崎の外、神奈川、函館を開いて貿易を許すに至つたまで、前後二百十八年の久しき間、長崎は海外との交通々商に於て、其唯一の起點たり、又その唯一の終點であつた。其狀恰も今のポーランド國が海への唯一の出口たり、又海からの唯一の入口たるダンチヒ自由市の如きものであつた。更に前記の如く長崎は天正年中一時ポルトガル天主教會の事實上の所領として、領主大村氏の治外に在り、天正十五年秀吉に依つて沒收せられた後、文錄元年(1593)寺澤廣高を長崎奉行となし、徳川氏に至つても幕府の直轄として、慶長八年(1603)小笠原一庵を奉行に命じたる以來、常に此地に奉行を置き、奉行は長崎市を管し、兼ねて支那、オランダ兩國貿易の事を司り、又この地に據つて諸外國の動靜を監察し、外寇に備へ、有事の際、將軍の名に於て九州、四國、中國の諸大名に號令するの特權を與へられ、直接に幕府老中の支配に屬してゐたのである。即ち長崎は行政上、全然他の地方とは特異なる地位を保有してゐたのみならず、鎖國令以前に在りても、其地方行政は市民の自治に委せられ、町年寄、乙名(名主)等ありて之に任じ、警察の如きも亦自治にて之を組織してゐたのであるから、公式上には長崎奉行あり、其下に長崎代官があつたけれども、實際には單に専ら徴税の事に當つてゐたものに過ぎざりしが如く、鎖國後に至つては長崎

の自治制一層發達して、幕府の直轄と云ふは、唯だ其名のみに過ぎなかつた。

元祿元年(1688)幕府は從來の貿易が、唐、オランダ商人と我商人との相對賣買であつたのを改めて、以後これを長崎會所に於て行ふことにした。一見恰も幕府は長崎市民から貿易を取上げたやうに思はれたが、實際に於ては會所は長崎市民の共有物であつて、幕府の所有ではなかつた。會所設置以後は唐、オランダの持渡品即ち輸入品は都て會所に買取りて、之を長崎、江戸、京都、大阪及び堺の五ヶ所商人に賣渡し、又唐、オランダへ渡す可き代り品即ち輸出品は、會所にて諸方より買集めて、之を唐、オランダ商人に賣るのであつて、此輸出入品の賣買から得る利益は會所の收入に屬し、此外輸入品に課する税その他の雜收入を加ふれば、會所の年々の收益は夥しき巨額に上り、其内から幕府へ收むる運上金、市の行政費、諸地役人俸給、市民へ配當金等を支出しても、尙ほ年々五萬兩の剩餘金を存し、之を會所の積立とした。其積立金は年と共に増大する一方であつたから、江戸城炎上の節には、毎度十萬兩を獻ずるを例とし、幕末に及んでは海防費、製艦費等の爲に數十萬兩を負擔したこともあつたに拘らず、安政條約實施に至りて收入の途を失ふた際、尙ほ五十餘萬兩を貯藏してゐたと云はる。斯くの如く長崎の財政は非常に裕であつたので、自治の成績大に擧り、會所、市政、警備、貿易、對外の諸役は悉く地役人を以て任じ、幕府よりは奉行その他の役人を在

(44)

勤せしめたけれども、長崎貿易及び市政の錯雜なる、俄に江戸より來りて容易に通じ得べき筈なれば、都てを地役人の爲す所に委せ、却つて制を彼等に受くるの實情であつた。幕府は其弊を認め、兼度か之を改めて、長崎の自治を罷め、實權を收めんとしたけれど、毎度市民の反對に會ふて改革は遂に行はれず、當時「御老中でも手の出せないのは、大奥、長崎、金銀座」と云ふ俗語が行はれた程であつた。以て長崎の自治が如何に強固に維持せられたかを見る可く、事實上、幕府治外の一獨立地域を成してゐたのであつて、恰も今のポーランドの爲に海への出口たるダンチヒが、特に獨立の自由市たる地位を保有してゐるのと、其趣きに頗る酷似するものがある。

(三) 西洋文明の出張所

然も長崎は單に我海外貿易に於ける一通路たるだけではなかつた。既に秀吉の時代から最も多く海外の文物技藝を移入したのも亦長崎であつて、明國の文學、書畫、工藝等皆この地を経て我國内に傳播したるは勿論、ポルトガル、スペイン、オランダ諸國よりするもの亦多くこゝを通過したのである。殊に寛永の鎖國以後に在りては、海外文明の輸入一に長崎を経たのであるから、爾來二百餘年間、ヨーロッパの文化を日本國民の間に嚮導したものは長崎であり、又日本の官民が諸外國の事情を知り、世界の形勢を窺ふことを得たのも、長崎これが媒介たるものであつた。享保五年(一

八代吉宗が所謂蕃書の禁を解くに及んで、醫學、天文、數理、各國の歴史、世界の地理等に關するオランダ書が輸入せられ、之を讀む爲に蘭學自ら勃興するに伴ひ、蘭學を修むるには、長崎出島に在留するオランダ人か、又は長崎會所の通詞に就くの外なかつたから、蘭學に志あるものは四方より長崎に遊學すること、恰も今日の學者が歐米に遊學するのと正しく同様の流行を成してゐた。

延享元年(1784)幕府の書物方青木文藏(昆陽)は、吉宗の命を受けて長崎に赴き、オランダ通詞西善三郎、吉雄幸作、本木仁太夫に就て蘭學を學ぶ。昆陽は實に我國蘭學の一開祖である。西等乃ち幕府に蘭書講讀の公許を願出で始めて許さる。西洋學術の講究これより漸く興るに至つたのであつて、西、吉雄、本木三人の長崎通詞こそ、後に出づる我蘭學者の師事したる最初の洋學者であつた。

十八世紀の中葉、即ち我明和、安永の頃(1780-1800)ロシアの東亞侵略政策着々その歩を進め、既に千島群島の一部を蠶食し、南下の勢力漸く切迫するに至るや、憂國の士にして海外の形勢を知らんとするものは、自ら長崎に下り、直接にオランダ人、殊は出島のオランダ商館長、即ち所謂甲比丹に従ふて教を受け、之に據つて各警世の書を著はし、以て對外の國事に急なるを國民に警告したのである。其中にて我開國論者の最初の一人たる工藤平助は、元仙臺藩の醫者であつたが、江戸に出で青木昆陽の門に入り、更に長崎に遊びて親しくオランダ人に接し、當時の世界の大勢を知り、

(416)

天明三年(1783)『赤蝦夷風説考』上下二巻を著はす。我より進んでロシアと貿易を開くの説を唱へたものであつて、彼は實に開國論の率先者であつた。其書中に、ロシアの南下と千島占領を説き、又ロシアが我漂流民を語學教師に利用するの風説を記してゐるのは、當時のオランダ甲比丹 A. W. Feith か又は Isaac Titsingh かより、長崎で聞いた知識であつたと察しられる。

林子平亦仙臺の人、工藤平助の友人である。安永四年(1775)長崎に赴き、同六年(1777)再遊して唐商、蘭人の間に交り、彼亦甲比丹 A. W. Feith に就て學ぶ。天明五年(1785)著はす所の『三國通覽圖説』は、朝鮮、琉球、蝦夷三國の地理を記し、小笠原島に關する記事を附したものであるが、其蝦夷及び小笠原島に就て記述するもの、中に、『安永の末年、小子肥前の鎮臺館に遊事して崎陽に至り、和蘭人アーレント・ウエルン・ヘイト(Aarend Werle Feith)に逢ふ。ヘイト語て曰云々』、又『ヘイト其地理書ゼオガラーヒの説を説じて曰く云々』とあるに徴して、其著作の長崎仕込みであることが明である。ゼオガラーヒとはオランダ人 Hübner の Geographie のことであると云ふ。寛政三年(1791)の『海國兵談』に至つては、清國、ロシア等より來寇の憂あるを警め、之に對して海上防備の策を論じたものであるが、西洋流の海戰、陸戰の戰略、戰術、武器、軍法等を説く所、其知識の根據が殆ど専ら長崎蘭人より聞く所に在るは云ふまでもない。此書は實に海防論の第一聲を成すもので

あつて、當時大に幕府を驚かしたことは周知の事實である。

蘭學の革命的著述たる『蘭學階梯』(天明八年(1818))の著者大槻玄澤亦長崎に遊び、通詞本木榮之進に就て蘭學を學んだ。蘭學は杉田玄白、前野良澤に依つて興り、大槻玄澤に依つて大成せられたものであつて、玄澤の『蘭學階梯』一たび出で、洋學に志すもの其恩澤を蒙らざるなし。此書が我開國の機運を促進し、後年維新革命の一要因を成したる功は著大である。一に玄澤が長崎遊學の賜物であると云はねばならない。司馬江漢は日本に於ける洋書の元祖である。天明八年(1818)長崎に下り、甲比丹 Isaac Titsingh (當時の書にイサアカ・チツシンギ又はテツチンギと呼ぶ)に就て始めて學ぶ所である。兼ねて蘭語を修め蘭書を讀で西洋の事情を解す。彼も亦初期開國論者の一人であつた。幕末に於ける開國論の熱心家高野長英も亦長崎に學んだものである。即ち文政八年(1825)長崎に赴き蘭醫 Siebold に師事して醫學を學び、又廣く西洋の博物、兵事、地理、歴史に通ず。天保九年(1838)英船モリソン號來航の報あるや、幕府が無謀にも之を打拂はんとするを聞き、『夢物語』を著はして英國の國力を説き、槍攘の不可なるを論辯したことが、官憲の忌憚に觸れ、罪を得て自殺するに至つた。彼と共に同じ運命に死んだ小關三英も、曾て長崎に遊學して Siebold の教を受けたる蘭學者にして開國論者の一人であつた。

(47)

當年の長崎は正しく西洋文明の出張所であると共に、世界の事情の案内所であつた。時勢を慨し、洋學を志すもの競ふて長崎に遊學し、オランダ人又は通詞に就て蘭語を學び、蘭書を読み、西洋の國情、世界の形勢を知り、始めて世界に於ける日本の姿を發見するに及んで、開國々防の急務なるを覺り、其聞く所を以て著書に編述し、其學ぶ所を以て塾生に教へ、以て一世を警醒せんとしたる洋學者の例は殆ど無數である。即ち長崎は洋學の發祥地にして、開國論の發源地であつた。而して洋學及び開國論が維新革命の有力なる誘因であつたとせらるゝ意味に於て、長崎遊學は、フランス革命、ロシア革命に於ける志士學者等の外國出遊が、其革命の遠兆遠因を成すものと認められるのと、恰も其軌を一にするものと云はねばならない。